

市史だより

がちまやあ Ga č i - m a j a a

第18号・2009年10月2日(金)発行
年3回(5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

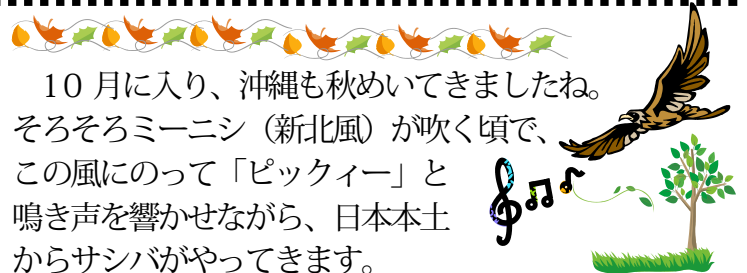
問い合わせ・情報提供先



(098) 893-4430

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp



10月に入り、沖縄も秋めいてきましたね。そろそろミーニシ(新北風)が吹く頃で、この風によって「ピクイー」と鳴き声を響かせながら、日本本土からサシバがやってきます。

サシバは、ワシタカ科に属する中形のタカで、全長約50cmほど、カラスぐらいの大きさです。頭から背中などは赤みのある褐色で、胸から腹にかけては横じまがあり、眼光が鋭く、カッコイイ鳥です。方言では“タカ”と言いますが、鷹類はすべてタカという名で一つにまとめて呼ばれており、沖縄でタカと言えば、ほぼサシバを指しているようです。

しかし、その鳴き声の聞こえ方はさまざまで、一番多いのは「チンミー」ですが、「タックイー」(宜野湾・我如古)、「チャックイー」(伊佐)、「チャックイーチャックイー」、「チンミー」、「ケンミー」(大山)などもあります。みなさんにはどう聞こえますか?

サシバが群れて飛ぶ「タカワタイ」(サシバの渡り)を見て、新城では「クングワチウガミシーガ ハイギーサ(9月拝みの時期がきたね)」と言っていたそうです。また、このタカワタイの9~10月頃に降る霧雨を「タカヌシーバイ」(サシバの小便)と言い、こ

の雨に濡れて引く風邪のことを「タカヌハナフィチ」(サシバの風邪引き)と言うそうです。

サシバは、沖縄本島からさらに宮古・八重山を南下して東南アジアで冬を越しますが、なかには単独で行動して居残るものもいます。このようなサシバは老鳥や若鳥などの落ちこぼれだとされ、「ウティダカ」(落ちサシバ)と呼ばれます。それから、サシバのことわざもあります。「タカヌ モーレー、ガラシン モーイン(サシバが舞うと、カラスも舞う)」。これは「鵜の真似をするカラス」と同じく、自分の能力を考えずに、やたらと人の真似をして失敗する例えです。

このように、サシバにまつわる言葉が色々あるように、とても身近な鳥でした。食用として市場などで売られていたこともあり、タカジュシー(鷹雑炊)にして食べたそうです。

ですが、現在は国際保護鳥ですから、決して捕まったりしないでくださいね!



いくさゆー 宜野湾の戦世を語り継ぐ

去る6月27日(土)に宜野湾市立博物館において、「第2回 宜野湾の戦世を語る」講演会を開催しました。今回は沖縄戦を研究している沖縄国際大学の吉浜忍先生と、戦争当時13歳で沖縄戦を体験した市内在住の松川貞雄さんの2人からお話を頂きました。当日は49名もの人が講演に耳を傾けていました。ここでは、松川さんの戦争体験談を少しですが紹介します。

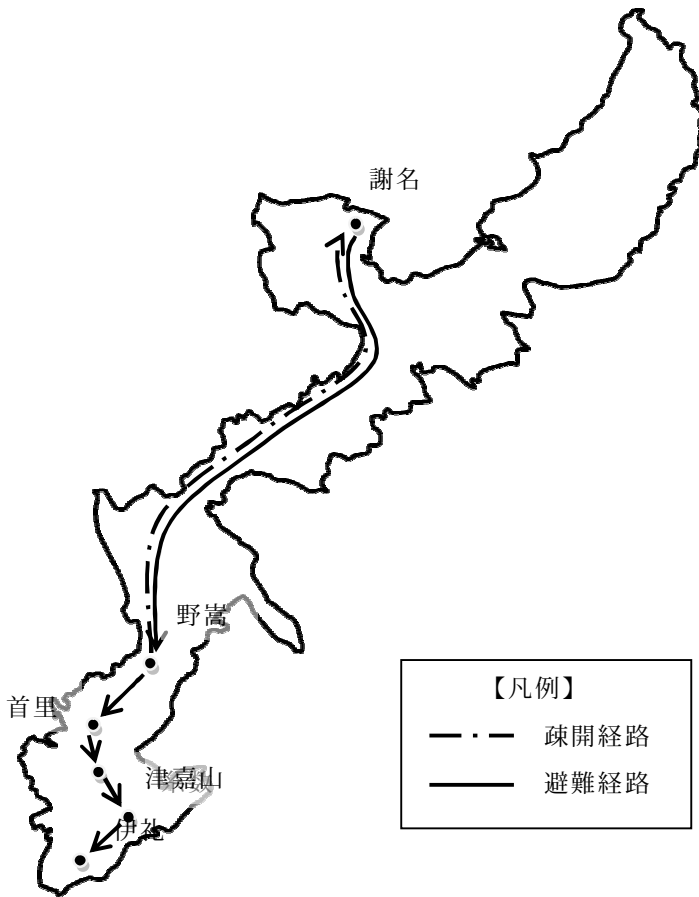


講演会当日の様子



松川さんの疎開・避難経路

◆疎開・避難経緯◆



- 3月24日 今帰仁村謝名へ疎開。
歩いて今帰仁へ向かう。
- 3月29日 食糧調達のため再び、野嵩へ向かう。
途中、金武で艦砲射撃にあう。
- 4月1日 米軍上陸
北部に戻ることが出来ず、野嵩～首里～津嘉山を経て、南部へ避難する。
- 5月頃 旧玉城村糸数にて、日本軍の手伝いをさせられる。
日本兵に、宜野湾村民はスパイだといわれる。
- 6月頃 旧摩文仁村伊礼にて、砲撃を受け負傷。
伊原・山城付近で捕虜となる。

旧玉城村糸数での体験

「糸数では日本軍の球部隊が掘った壕がありまして、その壕に入れてもらいました。2～3日した頃、日本軍が壕に来て、玉城村親慶原^{おやけぼる}で軍馬を飼っているのので、軍馬の飼料を刈って持っていくようにと命令されたのです。それで男4～5名で、キビの葉を切って、夕方、これを担いで持っていきました。するとそこに



聴衆に語りかける松川さん

は軍馬 2～3 頭が機関銃で撃たれて倒れていたのです。肉は兵隊や防衛隊が全部取ってしまって、骨だけが残っていました。

それから、糸数辺りには芋が沢山ありました。芋を掘ってきて壕の前に積んで、もし芋掘りに行けなかった場合のために貯めてあったのです。

軍馬の飼料刈りをしばらくしていたのですが、壕に他の日本軍の将校が来て、糸数グスクの下のほうに足を怪我

した兵隊たちが収容されているから、面倒を見てくれと言ってきたのです。私は姉さんと一緒にそこに連れていかれました。そこでは、あの頃は薬というものはないので、豚の油に塩をまいて兵隊の傷口に塗ったり、包帯を洗ったりしました。それから炊事もしました。

5月26日の晩、自力で歩ける兵隊たちは首里に総攻撃をするということで、爆雷を背負って全員出て行ったのです。それでようやく解放されて、自分のいた壕に戻る事が出来たのです。」

旧摩文仁村伊礼での体験

「伊礼辺りには壕らしい壕はないものですから、焼け残った納屋の壁を積みなおして、竹とか木の葉なんかを上置いて、そこに入っていたのです。

あの頃は 13～14 名くらいの方と一緒にでした。親指くらいの芋 2～3 個をみんな分けて、お汁にして食べていました。一日湯飲み茶碗で一杯、輪切りにした芋一枚くらいしか入っていませんでした。朝はサトウキビ畑に行ってサトウキビを取ってきて、日中はこのキビをかじって飢えをしのいでいました。

6月18日頃だったと思いますが、昼間から道路いっぱい避難民が通るもの
ですから、そこに知人や部落の人がいないかなと思って眺^{なが}めていました。その時、迫撃砲の集中攻撃が始まりました。迫撃砲の集中攻撃というのは、大砲を落とすような感じですが、4m四方に4発くらい落ちたと思います。私たちがいた屋敷の裏には竹やぶがあったのですが、その竹やぶが一時間くらいで畑みたいになっていました。

私たちがいた納屋にも前と後ろに2発、迫撃砲弾が炸裂しました。それで4名が亡くなりました。小さい子どもたち2人は無傷でしたが、残りはあちこち怪我をしました。私も人差し指をやられたのです。

危険でそこにはいられないですから、同じ屋敷でしたけど、フール（豚小屋兼トイレ）に入る事にしました。フールは、大きな石で囲まれているので、その上に身を隠すために竹の葉や木の葉を置きました。

翌朝、夜明けとともにプールに入ろうとした時に、また迫撃砲の集中攻撃が始まりました。一緒に避難していた人の中に足をやられて、自力で歩けない人が一人いました。この方を連れに出ようとするけれども、あまりに攻撃が激しいものですから、出ることが出来ませんでした。しばらくして攻撃が少し止んだのでプールから出て、この方を連れに行こうとした時には、もう亡くなっていました。

1時頃、米軍の第一線が通って行ったので、私たちは「どうせどこにいても死ぬはずだから、なるべくは自分のシマ(故郷)に近いほうがいい」ということで、そこを出てシマに向かって歩いていました。しばらくすると、アメリカの2世じゃなかったかなと思うのですが、この方から「今から歩いたら危ないから、今晚はここに居なさい」と言われました。そこは伊礼の北側にあたる潮平部落でした。その東側の屋敷に入れられ、翌日まで過ごしました。

この屋敷の角にあった壕から、1歳か2歳くらいの男の子が2人、私たちのところに這ってきたのです。私たちもみんな怪我をしていたので、助けようと思っても助けられないのです。それに私たちも4歳の男の子と、1歳の女の子が一緒でした。這ってきた子供たちを抱っこして、また壕の前まで連れて行きました。するとまたこちらに戻って来てしまうのです。こういう状況を何度か繰り返しました。

その夜は雨が降り、翌朝見てみたら、2人の男の子は灰の中で死んでいました。今でもその情景はまぶたの裏に焼きついています。」



これからの世代へメッセージ

「戦争は、あってみて戦争の惨めさがよく分かるのです。だから、戦争は絶対にやっちゃいけないのだということはみんなも知ってもらいたいと思うのです。

今でも南部へゴルフに行くと、コースのそばの木の中から今でも「助けてくれー」とか「水くれー」とか、今にも叫びそうな、叫んできそうな気がして、ゴルフも落ち着いて出来ないような状態です。」

【ご来場いただいた皆さまからの感想】

- ◆ 「もっと自分達若い世代が戦争を知る事が重要だと思った。」〈10代・男性〉
- ◆ 「13歳の頃の戦争体験を、こんなに鮮やかに覚えているものかと思うと、戦争が人に与えるインパクトを思い知らされた気がしました。」〈20代・女性〉
- ◆ 「今回の様な催し物を数多く企画して頂き、故里を知るチャンスを作っていただきたい。」〈60代・男性〉

当日ご来場の皆さま、講演いただいた吉浜先生、松川さん本当にありがとうございました。



戦後のほじまりを歩く～野嵩収容所～



7月5日（日）、慰霊の日企画展の関連企画として、野嵩収容所の跡を歩くイベントを行いました！※野嵩収容所については、市史『宜野湾 戦後のほじまり』などをご覧ください。

当日は市内外から約30名の参加がありました。また、収容所での生活を経験した野嵩出身の松川貞雄さんが、その体験を語ってくれました。そのお話を紹介します☆

野嵩クシヌカー（湧き水）



戦前は水も豊富で涸れることもありませんでしたが、収容所時代は、ここに野嵩区民の何倍、何十倍という方々が収容されていたので、この井戸も、干上がっていました。

湧き水の端の方に、水が湧いてくるところがあるのですが、ここをちょっと掘ってそこに水がたまるようにしていました。

水を入れる缶をそこにたくさん並べて、避難民は夜が明けないうちから、順番を待って、たくさんならんでいましたね。

この建物は戦前からそのままですね。

私の仕事は、あの当時で言うハウスポーイでした。米兵の寝床をとってあげたり、靴を磨いたり、それから部屋の掃除ですね。炊事なんかもしました。炊事は始め米兵がやっていたのですけれども、後からは米兵から教わって、私が簡単な料理を作りました。フライドポテトやシチュー、それからハムを焼いたりもしました。

ここの井戸は水がたくさんあって、この辺の住民の方たちが水をもらいに来ていましたよ。

MP 事務所跡



野嵩南校跡



ここは戦後初めての小学校で、野嵩初等学校と呼んでいました。

この屋敷はホンヤ（母屋）もアシャギ（離れ）、畜舎も全部瓦ぶきでした。ホンヤの一番座が職員室で、アシャギが高等2年、今だったら中学2年くらいの教室です。畜舎の上も教室でした。

それから低学年は、向こう側、戦前は畑でしたけど、そこにテントとかやぶき校舎を作って、そこで1年から6年生までは土間の教室で勉強していました。道の反対側は運動場で、米軍が作ったものですが、非常に広がったです。

松川さん、本イベントへのご協力ありがとうございました。今回松川さん他参加者の方々のご協力のおかげで、とてもいいイベントにすることができました。

市史編集係では、今後も機会があればこのようなイベントを開催していきたいと思っております！

企画展「琉球王国の小さな遺産」



☆ 企画展をやりました！

去る9月9日（水）から9月27日（日）にかけて、宜野湾市立博物館において「琉球王国の小さな遺産～ぎのわんの印部石～」展を開催しました。

印部石とは、沖縄県が琉球王国だった時代、1737年から1750年にかけて実施された「乾隆検地」（「元文検地」または「乾隆天御支配」ともいう）の際、測量の基準点として置いた石のこと。この印部石、かつては一つの間切（注①）に200～300基ほど、琉球全体では7,000～8,000基ほどが設置されたといわれています。

企画展では、宜野湾市内で現存が確認できる23基の印部石のなかから11基を展示したほか、印部石の拓本や写真や、『おもろさうし』（尚家本）や『年貢帳』、明治時代の「土地整理附属地図」（市指定有形文化財）など貴重な史料もあわせて展示しました。このように、企画展では、印部石そのものの紹介にとどまるのではなく、王国時代、宜野湾間切が創設（注②）された背景や、王国時代から明治にかけての宜野湾間切の様子が伝わるように構成しました。

☆ 拓本をとってみよう！

さて、今回の目玉の一つとして、印部石の拓本づくりにチャレンジした普天間中学校5名のみんなの写真を展示しました。拓本をとるときのみんなの表情は真剣そのもの。職場体験学習の一環とはいえ、一生懸命に仕事に向き合う彼らの姿に、私たち市史編集スタッフも「初心忘れるべからず」をあらためて教えられたような気がします。

みんなお疲れさまでした。そしてありがとう！



普天間中学校のみんな
拓本はうまくとれたかな？



☆ 謝辞

最後に、今回の企画展

を通じて強く感じたのは、地域の歴史的遺産に対する市民・県民の皆さまの関心の高さ。お答えいただいたアンケートには「説明が詳しく、測量を身近に感じることができた」、「琉球王国時代の高い測量技術に驚いた」など…。

ご来場していただきました皆さま、また、展示会を開催するにあたってご協力いただきました各関係機関の皆さまに、この場を借りましてあらためて感謝を申し上げます。ありがとうございました！
m(_ _)m



「ア 曾ける原」の印部石
堂々の復活か？？



注①

「間切」とは現在の市町村に相当する行政単位。

注②

1671年、創設された宜野湾間切は浦添、中城、北谷間切からそれぞれ村（ムラ）が編入された。

宜野湾の印部石、那覇へ行く！？

宜野湾の印部石が那覇へ行きました。さて、何のことかといいますと、8月7日（金）から8月31日（月）まで、那覇市歴史博物館で企画展「琉球王国の測量技術と遺産～印部石（シルビイシ）～」が開催（主催：沖縄県地域史協議会、那覇市博物館 後援：国土交通省国土地理院沖縄支所、沖縄県土地家屋調査士会、社団法人沖縄県公共嘱託登記土地家屋調査士協会）されました。その中で宜野湾市が保管する印部石の現物資料と、写真パネルが展示されたのです。展示された現物の印部石は、「ヨ ふてま原」銘の石で、宜野湾市以外に主催地の那覇市や西原町、南風原町、うるま市石川、八重瀬町などからも出品されました。

印部石は、琉球王国時代に設置されました。当時の測量方法は、日本本土と共通点が伺われますが、この印部石に関しては、本土にはないようです。印部石を置くという技術がどこから琉球に伝わってきたのかは謎で、これからの研究に期待されます。



那覇市歴史博物館で展示された宜野湾の印部石

新しい印部石が見つかりました！

NEW SHIRUBIISHI

前回の「がちまやあ」17号で、宜野湾市内で確認された印部石について紹介しました。その後、この「がちまやあ」を見て、大謝名の方から「私の家にも文字が彫られた石が親の代からあるけど、見てみないか」との問合せがありました。早速、行ってみたところ未確認の印部石ということがわかりました。石は2基で、大切に保管されており、文字を確認したところ「あ いつ川原」「む こし原」と刻銘されていました。

その後も、野嵩一区自治会から当自治会が保管していた「ヒ いれた原」銘の印部石が、6月30日に文化課へ寄贈されました。寄贈下さいました野嵩一区自治会と、関係者へ感謝申し上げます。

前回の「がちまやあ」から3か月の間で、新たに3基の印部石が確認され、宜野湾市内では23基（うち1基は消失）が確認されています。

これからも印部石を探していきたいと思っておりますので、市民の皆さんからの情報提供、お待ちしております。



新たに確認された印部石。左から「あ いつ川原」「む こし原」「ヒ いれた原」



宜野湾の獅子と籠



●獅子舞

今年は10月3日(土)が旧暦8月の十五夜にあたり、県内各地で獅子舞が行われます。獅子舞の由来は、琉球王国の時代にまでさかのぼります。県内で獅子舞が演じられている、あるいはかつて演じられていたという字は約150カ所もあります。多くの場合、獅子には魔除けとしての意味合いがあるようです。



普天間の獅子

●獅子と籠の関わり

獅子舞の獅子には、多くの伝承がありますが、中でもユニークなものに、葬式に使用された籠(コ^{ガン}、赤馬^{アカンマー}ともいう。死者を納めた棺箱を墓まで運ぶ朱塗りの葬具で、現在の霊柩車にあたる)と関わる話が、北は恩納村から南は糸満市・南城市にまで広がっています。その内容は、「獅子と籠は夫婦である」「獅子と籠を交換した」というようなものです。



旧勝連町浜比嘉島の籠

●宜野湾市内の獅子と籠

宜野湾市内でも同様の話が、普天間と神山に残されています。普天間の獅子には、「かつて獅子は野嵩にあり、普天間には籠があったが、普天間宮のある普天間に死者を運ぶ籠があるのは不浄である、との理由で、野嵩の獅子と取り替えた」という話があります。また、喜友名では、「普天間が獅子と籠を交換した相手は喜友名である」と伝わっています(図1)。

神山では、「神山は籠を、字宜野湾は獅子を所有しており、その籠と獅子を交換した」と伝わります。

この話には続きがあり、神山では交換した獅子を、頭・胴・尾の三つに分けて、頭を上森、胴を赤森、尾を屋号伊波の東の十字路に埋めたと伝えられています(図2)。この3カ所は、神山の字の拜所で、旧暦6月15日には獅子の供養御願が行われていました(現在、拜所は神山郷友会事務所敷地内に合祀されている)。

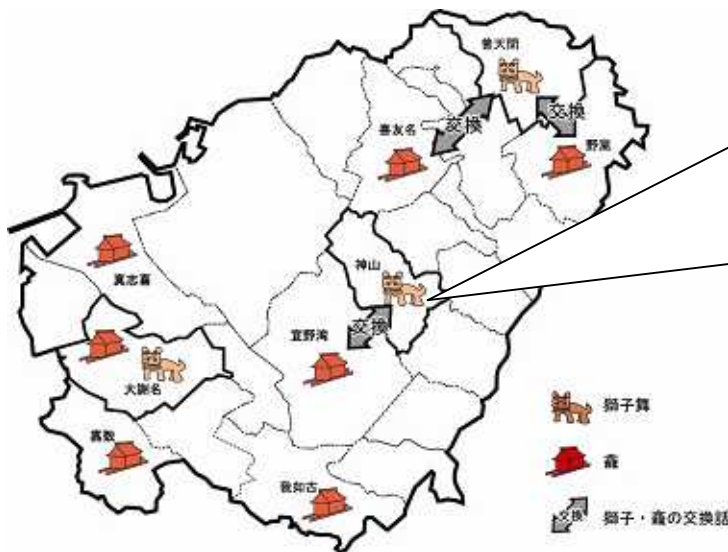


図1:市内の獅子・籠の所有字(昭和20年頃)



図2:神山の獅子を埋めた場所(昭和20年屋号地図)

●まとめ

祭りの芸能や厄払いとして知られる華やかなイメージの獅子舞の獅子と、葬式の道具である籠を交換するという話は、今の私達の感覚では意外だと感じます。しかし、このような伝え話から、昔の宜野湾人の生活の感覚が見えてくるのかもしれませんが。